

PCプレス

Prestressed Concrete 情報誌

2015 / Sept.

vol.008

清流・長良川を美濃国にたずねて

特別企画

PCのニューフェイスたち

PC建協だより

北から南から



一般社団法人

プレストレスト・コンクリート建設業協会

JAPAN PRESTRESSED CONCRETE CONTRACTORS ASSOCIATION

[略称]
PC建協

Index

#005	#004	#003	#002	#001
北から南から	お天気雑記帳 偏西風	P C 建協だより	P C のニューフェイスたち	清流・長良川を美濃国にたずねて
p.44	p.43	p.40	p.11	p.1



表紙のイラスト／鮎之瀬大橋
「清流・長良川を美濃国にたずねて」で紹介する鮎之瀬大橋と釣り人をイメージしたものです。

広報誌の名称について



は、コンクリート(C)にプレストレス(P)の力が

作用した様子を表現したもので、「プレス」は定期刊行物を意味しております。



鮎之瀬大橋

Ayunose ohashi

1

#001

清流・長良川を

美濃国にたずねて

千三百年つづく幽玄な原風景

長良川鵜飼

屋形船での宴を終えた頃、打ち上げ花火を合図にオレンジ色の灯が6つ、上流に浮かび上がった。篝火を焚いた鵜舟だ。それぞれ10羽の鵜を従えてゆっくり下ってくると、目の前で鵜飼が始まった。

岐阜の夏の風物詩、長良川鵜飼。飛鳥時代末期の戸籍に残る鵜匠の一家出身と見られる女性に関する記述を由来とし、織田信長が嫡男・信忠の婚儀を控えて武田信玄の使者にも披露したと伝わる古典漁法は、毎夜のごとく繰り広げられる。10本の手縄を巧みに捌き、喉元に溜めた鮎を鵜から吐き出させる鵜匠の妙技。闇の中を川面にゆらめく篝火。「ホウホウ」と響く鵜匠の掛け声。俳人・松尾芭蕉が言い表した、その幽玄なる世界観。

おもしろうて やがて悲しき 鵜舟哉

(松尾芭蕉)

長良川で行われるもう一つの鵜飼が関市の小瀬鵜飼だ。付近に民家や街灯などがない漆黒の暗闇と静寂の中に浮かぶ3人の鵜匠の素朴な姿こそ、より古来の風情に近いと評する向きもある。

小瀬鵜飼にほど近い鮎之瀬大橋の周辺には鮎の友釣り漁場もあり、愛好家の姿が絶えない。鵜飼とはまた違った趣のある、長良川の原風景だ。

▶織田信長像
を携える
右手に種子島（火縄銃）、左手に西洋兜



岐阜公園 金華山より岐阜市街・長良川を望む ▲

信長も天守から望んだ長良川 岐阜城

抜けるような青空が現れたら、日本一の清流へ行こうと決めていた。今年の梅雨は例年より長く感じられて、息が詰まりそうだったのだ。

その日は突然やってきた。岐阜駅で迎えてくれたのは黄金に輝く織田信長像。右手に種子島（火縄銃）、左手に西洋兜を携えてマントを羽織る姿をじっと見上げていたら、なんだか気恥ずかしくなってきた。閻魔大王のような形相で前方を射るように見据える姿が、頭のとっぺんから足の先まで、これでもかというほどびっぴかびかなのだ。恐るべし、信長公。後ろめたいことは何もないけれど、目が合う前に立ち去ろう。

「岐阜」は信長が命名したというのが通説だ。中国の故事から、天下を取る縁起のいい地名を選んだとされる。そして、ここから本格的に天下統一に乗り出す。

その拠点とした岐阜城が建つ金華山に登ると、歴史ファン垂涎のスボット「千成びょうたん発祥の地」があった。言わずと知れた豊臣秀吉のシンボル、ひょうたん。これを馬印とするきっかけになったのが岐阜城（旧稲葉山城）攻めと言われ、秀吉は腰に下げていたひょうたんを天高く掲げて勝ち鬨をあげたという。その

時に登ったとされる天狗岩を拜んでから、再び山頂を目指す。

天守閣からの眺めは見晴らしがよく、眼下には長良川が貫いている。さあ、下山だ。今回のテーマは三大清流の1つ、長良川。豊富な水資源や水にまつわる名所を求め、遡上する鮎のごとく源流を目指す。

おいしくて安全な水源を誇る 長良川中流域

長良川といえば鵜飼。鵜飼と言えば鮎。川岸の料理宿「鵜匠の家」で鮎尽くしのコース料理を堪能する。年魚とも書く鮎の生涯はわずか1年で、この時期はまだ若い。身がふわっと柔らかく、骨まで食べられる塩焼きと味噌仕立ての雑炊が絶品だった。これぞ天然鮎の醍醐味とグルメ通を気取ってみる。

岐阜市は知る人ぞ知る、水道水がおいしい都市だ。その水源・長良川の伏流水は塩素滅菌をしなくても飲めるほどの水質を誇るという。

そのルーツを知る手掛かりは金華山の麓、鏡岩水源地にあった。赤れんがの壁づたいに裏手へ廻ると、ヘンゼルとグレーテルの童話に出てくるお菓子の家のようにかわいらしい建物に突如現れた。昭和5年建造の旧ポンプ室と旧エンジン室で、今はそれぞれ水の体験学習館、水の資料館



鵜飼 10本の手縄を巧みに捌き、喉元に溜めた鮎を鵜から吐き出させる ▶

◀「鵜匠の家 すぎ山」鮎の塩焼き





▲ 伊自良村簡易水道配水池 日本初のPC(プレストレストコンクリート)タンクと目印の鳥居

として一般公開されている。

この地で水道事業の中核を担った功労者に安部源三郎という人がいる。旧内務省から派遣された技師で、昭和32年に日本初のPC(プレストレストコンクリート)タンクを建造した先駆者でもある。そのタンクが山県市に今も残るというので、迷わず訪ねることに。

いや、実際は少し道に迷いながら、目印と聞いていた2つの鳥居をようやく探し当てた。直径6メートルほど、高さは3メートルほどだろうか。葛や苔に覆われ情緒がある。電柱に鳥居を描いたら立ち小便が激減した、という有名な実証実験があるけれど、日本人の心には鳥居を崇める遺伝子が備わっているのかな。ここでもなんとなく拝んでしまう。

長良川に沿って岐阜市へ戻ろう。まだ陽は十分高い。少し遠回りをして鮎之瀬大橋(P1掲載)に立ち寄った。

シンブルな真一文字のシルエットが美しいPC箱桁橋で、小さなバルコニーが付いている。足下にはガラス窓。そこから長良川の川面を覗けると、という趣向だ。ベンチに腰掛けて川を眺めていると、釣りに興じる人がいた。鮎釣りだろうか。話を聞いてみたくなり川岸へ降りると、初老の男性が引き上げてきたところだった。今日は調子が出なかったらしい、難しい顔をしている。まだ水温が低くてダメだ、と言いついて残して行ってしまった。

水の資料館(旧エンジン室) ▶

▼ 水の体験学習館(旧ポンプ室)

1930年建造。国の登録有形文化財に登録されている。





▲ 美濃市 うだつの上る町並み



「Kitchen Café じじ・ばば」
モーニングセット ▶

◀うだつ 建物の梁の上に立てた壁。「うだつが上がらない(=生活や地位が向上しない、見栄えがしない)」という慣用句の語源。



胃袋と心を満たされたところで長良川沿いに北上し、美濃市へ。古くから和紙づくりが盛んな町で、日本最古の紙が東大寺正倉院に大宝2年(702年)の戸籍として残っている。もう1つの文化遺産が「うだつの上る町並み」だ。

建物の梁の上に立てた柱が転じて民家の防火壁を指すようになったうだつは、裕福な家でなければ上げることができない高価な代物。「生活や地位が向上しない、見栄えがしない」という慣用句「うだつが上がらない」

日本最古の紙をも生んだ清流 美濃市

翌朝7時。「岐阜モーニング」を求めて町へ出た。喫茶店のモーニングセットがおトクなのは名古屋とのイメージが強いが、実は岐阜も負けていない。コーヒー1杯の値段で朝食が食べられる店が県内の至る所にあると聞く。歩くこと3分。早朝6時から営業している「Kitchen Café じじ・ばば」を訪ねると、店内には出勤前のビジネスマンらしき男性が2人。さっそくオーダーすると、コーヒーに小倉トースト、サラダ、スパゲティに茶碗蒸しが付いてきた！しかもフオーク(笑)。なんてユニークなんだろう。笑い込みでたったの350円とは。

の語源だ。

「うだつの上る町並み」は天下分け目の関ヶ原合戦の後に完成した城下町の町割りを21世紀の現代に伝える貴重な遺産。江戸時代に思いを馳せながら、とある民家の引き戸を覗くと、男の子が宿題をやっていてびっくりした。建築遺産で暮らす家族がいるとは。慌てて引き戸から離れると「お母さん、バスタオルどこ？」という声が奥から響いてきた。

美濃市に残る橋も1つ見ている。現存する近代的な吊り橋で日本最古と言われ(大正5年完成)、長良川に架かる橋としても最古の美濃橋。山の緑に深紅の橋が遠目にも鮮やかだ。歩いて渡るとぴくりともせず、どっしりしている。今でこそ車は通れないが、50年ほど前まではバスなども通行していたという。近くに小学校や高校があるので、通学時間帯にはきつと賑わうのだろう。

時代の要請にこたえて変化した 坪佐橋

長良川に沿うように走る東海北陸自動車道が愛知・一宮／富山・小矢部砺波間で全線開通したのは平成20年のこと。しかし、始めから4車線だったわけではなく、当初は多くの区間で対面1車線だった。利便性の高まりと共に交通量が増え、対面に



▲ 美濃橋 長良川に架かる最古の吊り橋(国指定重要文化財)

よる事故防止などが叫ばれたことから4車線化が進んだという。そのため、上り車線と下り車線で仕様の变化が見られる箇所が随所にある。

郡上八幡IC／ぎふ大和IC間で長良川に架かる坪佐橋もその1つ。下り線は箱桁橋だが、上り線は波形鋼板ウェブ箱桁橋のため、並んで建つ橋脚の太さがまるで違う。軽量化が進んだ後者では、橋脚を細くすることができたというわけだ。真下へ行き見比べると、その違いがはっきり分かって面白い。



坪佐橋

Tsubosa bashi

2



名水百選・由緒ある湧き水の里

郡上八幡

さて、そろそろ休憩を取ろう。郡上八幡は目と鼻の先だ。

三方を深い山並みが囲み、長良川の支流・吉田川が流れるこの町にあるのは、環境省が選ぶ名水百選第1号に指定された宗祇水（そうぎすい）。西行・芭蕉と並んで「旅の三大詩人」と呼ばれた飯尾宗祇（いとおそうぎ）が、古今和歌集の大家で郡上領主だった東常縁（とうのつねより）から奥義を授かり（古今伝授）、いよいよ京へ帰るときに別れの歌を詠み交わしたという湧き水だ。

もみじ葉の 流るるたつた 白雲の
花のみよし野 思ひ忘るな

（東常縁）

三年ごし 心をつくす 思ひ川
春立つ沢に 涌き出づるかな

（飯尾宗祇）

以来、その水源には小さな祠のような小屋を建てて水槽を引き、今でも地元の人が夏にスイカを冷やすなどとして利用しているのだという。なんともぜいたくな話だ。生水なので飲んでみることはしなかったけれど、柄杓から手に受けた水はひんやりとして、とても気持ちよかった。

宗祇水 名水百選第1号に指定された ▶

玉石のオブジェ 石組みや石積み技術継承の名残だろうか ▼





長良川高架橋

Nagaragawa koukakyō



玉石の謎・石工の技術継承？

中津屋橋エリア

郡上八幡を発ち、いよいよ長良川の源流がある大日ヶ岳を目指して北へ北へ。

長良川鉄道越美南線と東海北陸自動車道が交差する辺りで車を停めて中津屋橋を見ながら歩く。すると、不思議な光景に目にとまった。玉石を積み上げたオブリジェのようなものが散見されるのだ。民家の庭先、歩道脇……。一体これは何？不思議に思ってから後日調べてみると、大小さまざまな河川が走り、町づくりに治水の知識が不可欠だったこの一帯には、玉石組みや石積みの技術を継承する土木集団が多かったらしいことが分かってきた（*1）。これらオブリジェはその名残なのだろうか。郡上八幡城の石垣を築いたというその技術は400年の時を経てなお受け継がれ、腕のいい石組み職人は未だに多いという。

はーん、それでピンと来た。

中津屋橋の建設当時。用地の譲渡をめぐって周辺住民と交渉が続いていたときのこと。住居の新築や移築を大手建設会社が申し出ても一向に首を縦に振らず、代々なじみにしている地元の職人に任せることを条件にする人が多かった、と聞いたことがある。もしかしたら、それもこの地ならではのエピソードなのかもしれない。

（*1）出典：郡上八幡観光協会ウェブサイト



中津屋橋 長良川鉄道越美南線と東海北陸自動車道が交差する辺り ▲

冬期通行を可能にした架け橋

長良川高架橋

続いて向かったのは、郡上白鳥で東海北陸自動車道から分かれて福井方面へ向かう中部縦貫道（油坂峠道路）の長良川高架橋。平成11年の完成当時、同じ形式（4径間連続PCラーメン構造）では国内最大規模のスパン156メートルを誇ったという曲線橋だ。緩やかながら大きく描いたカーブとスケールの大きさには確かに圧倒される。

見橋

imi bashi

4



分水嶺公園 長良川・庄川の源流分岐点 ▼



東海北陸自動車道をさらに北上すると鷺見橋がある。これがまた凄い。橋脚高はなんと、118メートル！もちろん、日本一の高さだ(*2)。橋の上を通っただけでは、この高さは分からない。見るなら下から見上げるに限る。県道452号線へ降りてみると、車を止められるほどの広さがある路肩を発見した。歩いて橋脚の真下へ近付いてみると、首が痛くなるほどの高さを実感。しかも、その全貌をカメラで捉えようと屈んでみても、ファインダーを覗くことができないほどだ。上手く撮れているだろうか。橋脚が欠けたり、橋桁が欠けたりを繰り返し、ようやく納得のいく写真が撮れた。

30階建ての高層ビルに匹敵

鷺見橋



清流・長良川の源流を求めて 分水嶺公園

旅はいよいよクライマックスへ。長良川の源流探しだ。まずは、ひるがの高原にある分水嶺公園を探す。それはその名の通り、大日ヶ岳から流れてきた水が二手に分かれるところ。一方は長良川となつて伊勢湾・太平洋へ注ぎ、もう一方は庄川として富山湾・日本海へ注ぐという。

実際にその地へたどり着き石碑を見つけたら、なぜかテンションは最高潮。自分で想像していたよりも遙かにワクワクしてきた。子どもの頃に読んだ絵本、確か「しずくのぼうけん(*3)」だったと思うけれど、バケツからこぼれ落ちた雫が水蒸気になつて天に昇り、やがて雨になつて地上へ落ちて大海原へと注ぐ冒険物語がある。これを思い出したのだ。ここで分かれた水も、それぞれの冒険に出るんだ！想像がどんどん膨らんでいく。早く源流を確かめなくちゃ。居ても立ってもいられなくなり、気が付いた時には川の流れに沿って歩き出していた。

ところが、いざ奥を目指してみる

と、つい先日までの雨で増水している川縁を歩くのは危険だと分かってくる。どうしよう…。山や川を歩くのに適した靴も準備していないし…。5分ほど進んだところで、分水嶺公園まで引き返す。

車で近くまで行けないだろうか。カーナビが頼りだ。川の流れに沿う道を選んで上流を目指した。奥へ奥へ。どうやらこの辺りは別荘地らしい。ペンション風、山小屋風の家がところどころに建っている。牧場もある。すると、とうとう立ち入り禁止の看板に遭遇。道と川は続いているのに、先へ進めなくなってしまった。上手くいけば「源流の碑」が立っているはずなのに、迷ってしまったようだ。悲しい哉、ここでタイムアップ。

後ろ髪を引かれながら分水嶺公園の近くまで戻ってくると「長良川源流最上流の滝夫婦滝」の看板と、寄り添うように落ちる二すじの滝。さらに、長良川に架かる最初の橋とおぼしき旧大滝橋も見つけた。源流にこそたどり着けなかったが、最初の滝と橋を見つけたので良しとしよう。

マイナスイオンを全身に浴びながら旅程を振り返ってみる。すると、橋の

レリーフや立て看板、軒先の提灯に至るまで、そこかしこに描かれた鮎の姿が思い出された。清流の女王・鮎が棲む長良川とそこに架かる変化に富んだPC橋の数々は、ひとときの涼を求め訪れた水の国・美濃国(岐阜)の旅の記憶にはつきりと刻まれていた。

(※2) 2015年現在、主塔を持たない道路橋でもっとも高い

(※3) 作：マリア・テルリコフスカ／絵：ポフダン・ブテンコ／訳：うちだりさこ／福音館書店



▶ 旧大滝橋 長良川に架かる最上流の橋 旧大滝橋
▲ 夫婦滝 長良川源流最上流の滝

清流長良川
“美濃～奥美濃”
PC桥梁
MAP



分水嶺公園
長良川・庄川の
源流分岐点。



本谷橋



長良川高架橋



鷺見橋



坪佐橋



中西高架橋



中津屋橋



郡上八幡
名水百選第1号の宗祇
水と玉石のオブジェ。



長野県



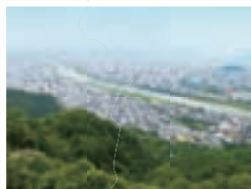
上河和橋



伊自良村簡易水道配水池



長良川大橋



岐阜公園周辺
岐阜公園より岐阜市街を望む。
夏の風物詩、鵜飼と鮎の塩焼き。



美濃市
うだつの上がる町並。



鮎之瀬大橋

愛知県